

荒木牧人作 『おれのホームレス体験記 どん底』

<前編>

- おかしら おい！ お前！ 何勝手にここお寝てんだ！
- 松蔵 ん…んあ…。
- おかしら ここはおれの住みかだ！
- 松蔵 わ、わあ…悪い、悪かった…すまねえ。
- おかしら んあ？ お前、見かねねえ顔だな。新入りかあ？
- 松蔵 え？…うん、まあ…。
- おかしら なあんだ。早く言えっつーの。いいよいいよ、寝てていいって。見たところ、悪いやろうじゃなさそうだ。
- 松蔵 あ、あんたは…。
- おかしら おう、おれは、ここら辺じゃ一番長いから、“おかしら”って呼ばれてんだ。お前は？
- 松蔵 松…蔵。加藤松蔵ってもんです。
- おかしら ああ、本名なんか要らねえからよお、呼び名だよ、呼び名。ニックネーム。
- 松蔵 したら、松、“松”って呼んでください。
- おかしら “松”か。まあよろしくな、松！ おっと、メシの時間だよ。アーメンのおばさんの給食があんだ。早くしねえと食べ損ねる。行くぞ！
- 松蔵 え、はい！
- (効果音) (給食場のガヤ)
- 松蔵ナレーション おれの名は加藤松蔵。おとといまで、建設現場の土方をしていた。今年で 56 歳になるが、もともと秋田出身で、農家をやっていた。でも数年続きの冷夏で、収穫がほぼゼロに近い状態になり、仕方なく上京して土方になった。内こことはすべて娘婿に任せて、向こうが何とか持ち直してきたら、すぐに戻るつもりだったのだが、なかなかそうはいかず、あっと言う間に 2 年近くたってしまった。走行するうち、今年の不況で仕事が無くなり、ついにおととい、勤めていた土建会社が倒産してしまった。ショックで仕事を探す気にもなれなかったおれは、パチンコ屋に夕方まで入り浸っていた。
- (音楽) (パチンコ屋の「軍艦マーチ」)
- それで少し稼いだおれは、明日のことを考えるのがイヤで、同じく失業者となった仲間と、夜の新宿へと繰り出した。
- 失業者 (酔って) 松つあん、松つあん、どうすんだよお、おれたちい、あしたからさあ、どうするよお。
- 松蔵 (少し酔って) ん？ どうするかなあ。国さ帰ろうかなあ。…って、帰るぜにもねえ

かあ。ハハハ。

ナレーション そのあとはあまり記憶がない。フラフラと路上を歩いて新宿駅に向かい、そいつと終電で別れ、なぜかおれ一人、新宿に残っていたところまでは、うつろながら覚えている。そしてガード下のホームレスのたまり場にたどり着くと、そのまま眠ってしまったらしく、翌朝、このおかしらに起こされたというわけだ。

源さん おーい、おかしら、こっちこっち！

富さん ここー。今日ねえ、何だか人が多くて量少ないけどさあ。

おかしら なあに、今日もおてんとう様の下で、こうやってオマンマが頂けるだけで幸せってもんだあ。

源さん おお？ そちらのだんなは？

おかしら ん？ ああ、今日ここに来た松だ。…うむ、やっぱ松は語呂が悪いや。“松つあん”、松つあんでいこうや。

松蔵 んん。…じゃ、松つあんです。よろしく。

源さん わしや源です。

富さん 富です。どうぞよろしく！

おかしら よお、メシメシメシメシ！

ナレーション そして 1 週間たった。おれは一人前の浮浪者、ホームレスの身になっていた。何とか来月までに仕事を見つけて、また働き始めなければ…、そう思っている。早く国へ帰るためには、それしかないんだ。

おかしら あー、うまかったなあ。何だ、松つあん、「もう一杯」なんて言っついて、まだ半分も食ってねえんか？ 考えごともいいけど、とりあえず食っておわん返さないと、おばちゃんたち、帰っちゃうぜ。

ナレーション ずっと心で泣いていた。これまでに何度も目にして、ひそかにバカにしていたホームレスに、今、この自分がなっている。野菜入りスープをすすると、妙に実感がわいてきて、国の家族の顔が次々に浮かんでくる。

おかしら さあてつと。散歩にでも行ってくつかな。松つあん、お前どうするよ。邸宅作るか、おれの近くに？

松蔵 ああ、はい。

ナレーション 誘われるまま、おれは駅のガード下の住みかまで戻ると、おかしらの家の隣に、屋根も壁も折りたたみダンボール製の我が家を作った。

おかしら 全室南向き。新宿駅徒歩 1 分。最高の環境だあな。

松蔵 ハハハ、お陰さんで。ところでおかしらは、もともと何を？

おかしら おい！

ナレーション そう言って、おかしらはグイと顔を近づけてきた。

おかしら それはおれたちの間じゃタブーだ！ 言っちゃいけねえ。

ナレーション おかしらは続けて、ここで決まりごとなどを延々と話してくれた。一つ、本名は

名乗らないこと。一つ、元の職業や家族関係は明かさないこと。一つ、病気のときは、互いに面倒を見ること。一つ…。会社には会社の決まりがあるように、ホームレスにはホームレスのおきてがある。一見何でもできそうで、実際は言ったりやったりしてはいけないことがあるのだ。

おかしら …だから相談事なんてのもお互いしちやいけねえ。するなら職業安定所にでも行くんだな。自分の失敗は自分で補うてもんだ。どうだ、分かったか？

松蔵 ああ、はい。

ナレーション “苦しい立場だな”と思った。西に傾いた太陽は、ゆっくりとビル街を輝かす。ふと手を入れたポケットの中に、少し折れ曲がったテレフォンカードが 1 枚入っていた。

(効果音) (電話音)

ウメ (フィルター音) はあい、もしもし、加藤でござえます。ああ、あんたあ！ どうしたの、ずーっと連絡さよこさないで。

松蔵 会社、つぶれてしまった…。

ウメ (フィルター音) な、何だって？ 会社さ、倒産したってか？ どうすんだべ、あたしたちは…。幸子だって、龍夫さんだって、必死に畑、頑張ってたよお。

松蔵 ああ。な、何とかまた、仕事を探すべと思ってる。

ウメ (フィルター音) 当たり前だよ。したども、今、どごさ住んでるの？

松蔵 ん？ あ、ああ…昔、仕事で知り合った仲間のところ、お邪魔させてもらってた。大丈夫、とにかくまた仕事見つけるから。

ウメ (フィルター音) 今、どごからかけてんの？

松蔵 新…、新宿だ。

ウメ (フィルター音) 新宿？ ああ、分かった、分かった。したども、ほんとに大丈夫なんだが？

松蔵 おお、大丈夫だ。何とかするから、二人にはそう言っとけ。おっ、電話切れそうだ。したら…。

ウメ (フィルター音) あ、あんたあ。

(効果音) (電話が切れ、ツーツー鳴る音)

ナレーション 電話をかけたのがよかったのか悪かったのか、おれには分からなかった。ただ、使用済みのテレフォンカードだけでは生活できないことははっきりしていた。その日から、改めておれの職探しが始まった。ビル掃除、警備員、大工さん、管理人、新聞配達人、工場内作業、居酒屋、…いろいろと当たってみたが、この年にもなると、だれもなかなか雇ってくれない。“すぐに見つかる”と甘い考えでいた自分に、だんだんいらだちを覚えながら、くる日も来る日も仕事を探し回った。そんなある日――。

源さん 松つあん！ 大変だあ、やっちゃった！ 富さん、富さんがやっちゃったあ！

松蔵 　　ど、どうした？ 何したあ？
源さん 　　（小声で）パチンコの勘定屋、襲っちまったんだ！ 今ラジオで言ってるよ。体の格好とかさあ、説明してて、ぜってえあいつだよ。
松蔵 　　落ち着けよ、まだ決まったわけじゃねえべ。現に富さん、今日の朝飯いたでしよう？
源さん 　　“缶草”置いてあんだよ。
ナレーション 　　“缶草”、それは以前、おかしらから聞かされたおきての中の一つだった。空き缶に雑草を差して自分の住みかに置いておくこの合図は、“自分がここにいられなくなった”とか、“自分の国に帰る”ということの意味していた。
源さん 　　あいつは、ここ長いんだ。そうすぐに出ていけねえだろ？ それにこのごろ、「金、金」と言っていたからよお。
ナレーション 　　行ってみると、確かに富さんの寝床には、コーラの瓶の缶草がぼつんと置いてあった。夜明け前からしずしずと降っていた雨が、今は激しく音を立てて、ガードの外のアスファルトをたたいていた。
（効果音） 　　（雨音、次第に激しく。）

<後編>

ナレーション 　　ホームレス生活が始まって 1 週間たったころ、おれは同じホームレス仲間の富さんが、パチンコの精算所を襲ったとのうわさを耳にした。
源さん 　　あいつに違いねえ。
おかしら 　　いやあ、何とも言えねえなあ。
源さん 　　昨日の夜、100 万か 200 万取ってたってラジオが言ってたぜ。
ナレーション 　　それから4日たった朝早く、富さんのその後の消息を知った。あまりにもあつげなく、あまりにも簡単に、富さんは住みかの隣の公園の森の中で、首をつっていた。姿はあの時のまんまで、遺書らしいものはなく、ただ足元には、ボロボロになった革靴と、大事にしていた偽物のエルジンの腕時計が、きちんとそろえて並べてあった。その日、拾った夕刊に富さんの首つり自殺の記事と、パチンコ屋を襲った犯人の記事が、小さく隣り合わせに載っていた。結局富さんは犯人ではなかったのだ。
源さん 　　おかしら、あいつ、何で死んだんだらう。…あいつ…。
おかしら 　　きっといろいろあったんだよ。いろいろとなあ。人生山あり谷ありだからよお、何だよ、松つあん、深刻な顔しちゃってさあ。いいじゃねえか、だれが死のうが、そいつの勝手だよ。そいつの考えで、意志で、死ぬんだからよお。
ナレーション 　　おれはそうは思わなかった。源さんは素直にうなずいていたが、おれはうなずけなかった。おかしらはあくまで人ごとで通そうとしていたが、それがホームレス魂とでも言うべきものなんだろう？ そんな魂なら、体からつかみ出してゴミ

箱に捨てたい気分だった。

それから 1 週間後、朝ご飯をボランティアでおれたちに食べさせてくれているアーメンのおばさんたちに混じって、一人の外人女性がやってきた。

メアリー

ハイ、どぞー。少しならお代わりありますよお。

ナレーション

仲間みんなは目を丸くして驚き、全員、その外人の女性に注目していた。

おかしら

何であんなのがここに来るんだろうなあ。おれたちに何する気だろ。

源さん

うーん、分かんねえ。けどいいなあ、外人は。金髪で、目が青くて、背がすらっとしてよお。病気にでもなって、一度ねんごろにお世話になってみてえな。明日も来てくれるのかなあ。

ナレーション

その女性は、それから毎朝、必ずやって来た。嫌な顔一つせず、優しく一人一人に話し掛けるその姿に、おれを含め多くのホームレスがとりこになっていた。ある朝、彼女はご飯を配る時、一緒に 1 枚の紙をおれたちにくれた。

おかしら

何だあ、(読む)『すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます。』公園前の教会です。どなたでも気軽にお越しください。』何だ、こりゃ。

源さん

あの女が休ませてくれるってこと？ え！（喜ぶ）ええ!? まさか、そんな…。

おかしら

バカ! こりゃ宗教屋だ。何だ、あの女、キリシタンだ。

松蔵

キリシタン…。キリスト教?

源さん

な、何? じゃあ、あれ、あのアーメンおばさんの仲間かあ?

おかしら

ああ。

ナレーション

おれはその日、自分の風体を気にしながらも、勇気を持って例の教会を訪ねていった。そこで、ホームレス仲間では一切話してはいけなかった自分の身の上話を、教会の牧師さんと、あの外人女性に話したのだ。女性の名はメアリーといい、1 年間の予定で、日本で教会のお手伝いをしているらしい。牧師さんは、おれの故郷の同じ団体の教会にも連絡を取ってくれ、そちらで仕事がないかいろいろ骨折ってくれた。そして 1 週間後、まさかと思っていたその仕事が見つかったのだ。おれはすぐに故郷の妻に電話した。

(効果音)

(電話音)

加藤ウメ

(フィルター音) あんたあ、今どこ?

松蔵

新宿だ。今から秋田さ帰る。そっちでやっっていけるよお。

ウメ

(フィルター音) そうだよ、あんたあ。息子夫婦の手伝いでもして、何とかやっっていけるべ。

松蔵

いや、違うんだ。仕事あるんだ、そっちに。

ウメ

(フィルター音) あん?

松蔵

ちよつといい知り合いができてよお。そっちで、まともな仕事探してくれた。

ウメ

(フィルター音) ほ、ほんとだか? う、うう。(うれし泣き)

松蔵 そうビェビエ泣くな。とにかく、今夜の貴社で帰るから、待ってれ。んだば。
(効果音) (電話の切れる音)

メアリー 松蔵さん、よかったねえ。奥さんは帰るのオーケー言ってた?
松蔵 オーケーオーケー!
メアリー そう。じゃああたし、教会行って、あっちの仕事のこと、詳しく聞くな。それでオーケー?
松蔵 オーケーオーケー!
ナレーション いよいよ秋田に帰る日が来た。おれは留守にしていたアパートを引き払うと、半月を過ごした新宿の住みかを訪ねた。
(効果音) (街の雑踏)

源さん もしかして、松つあん…か?
松蔵 ああ。元気か、源さん?
源さん おかしら…なあ。
松蔵 ああ、おかしら、どこだよ?
源さん 人、やっちゃってなあ。2人…。
(効果音) (鋭い金属音)

松蔵 やっちゃったって。おかしらが…? ほ、ほんとだか? ウソダだべ。
源さん さっきだよ。いきなりサツがきたと思ったら、「伊勢修三はいるか!」っておれにどなってきた。おれ、「そんなやつは知らねえ」つつつたんだ。したら、顔写真見してよお。

松蔵 おかしらだった…のか?
源さん ああ、間違いねえよ。今日、おかしら、朝からいねえんで、何か嫌な予感してたんだけどよお。おかしらの邸宅、見てみろよ。

ナレーション 言われるままに、おれはおかしらの住みかをのぞいてみた。きれいに何もなくなり、ただのダンボールの塊となったその空間の真ん中に、…缶草が置いてあった。

源さん ここはいいやつばかりだけどよお、何か、寂しいところだよなあ。
松蔵 …ああ。
ナレーション ふと公園の時計に目をやると、出発まであと2時間だった。
源さん お前も、いいやつだったよなあ。
松蔵 お前もだよ。
ナレーション そっと伸ばしてきた源さんの右の手を、おれは両手で包んだ。
源さん 元気でなあ。もう…戻ってくんないよ。
松蔵 ああ。源さん、一度あの外人の女のいる教会に行ってみれや。
源さん ああ、そうする。
ナレーション おれは、近くにあったジュースの缶を拾うと、缶草を作っている中に入れ、自分の住

家にそっと置いた。それからおれは、最後に教会に立ち寄った。

牧師 松蔵さん。慌ただしいのに、わざわざ訪ねてきてくださったありがとうございます。

松蔵 いえ、お礼を言うのはおれのほうです。牧師さん、本当にあなたは命の恩人だ。メアリーさんも。

メアリー え？ お礼はわたしたちにじゃなかったでしょう？

松蔵 あ、んだ。天の神様にお礼をするんだった。

牧師 そうです。いつも感謝の気持ちを忘れてはいけません。じゃ、あなたに毎日できるお祈りをお教えしましょう。

メアリー 救い主イエス様が、「このように祈りなさい」とお教えくださった祈りですよ。

ナレーション そう言って牧師さんは、“主の祈り”を教えてくださいました。おれはそれを神に書き写し、ポケットに入れた。

メアリー そう言えば、お昼ごろ、「警察に自首するんだけど、勇気が出ないからお祈りしてくれないか」って言う人が来ました。その方にも、刑務所の中でもお祈りできるようにと、あなたと同じ“主の祈り”を紙に書いて持たせてあげたんですよ。そして、その方、すごく喜んで出ていかれました。

松蔵 え？

ナレーション おれは、なぜか、それがおかしらのような気がした。

松蔵 天にまします我らの父よ、
願わくはみ名をあがめさせたまえ。
み国を来たらせたまえ。
み心の天になるごとく、地にもなさせたまえ。

おかしら (ダブる)我らの日用の糧を今日も与えたまえ。
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、
我らの罪をも赦したまえ。
我らを試みに遭わせず、悪より救いいたしたまえ。
国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

ナレーション おれは、心に響くおかしらの祈りの声を聞きながら、駅に向かった。思えば、どん底まで落ちて、何か大事なものをつかんだような、そんな半月だった。イエス…キリスト。そうだ、この方が、これから先、おれと一緒に、おかしらとも、それからきっとそのうち源さんとも、一緒にいてくれるんだ。――

(音楽) (希望に満ちた音楽、高まって。)

<完>